

連載

欧州から (15) カナダ・日本・ドイツ

石井 紘美

Hiromi ISHII

International Kunstakademie Heimbach

概要

この連載記事は主に欧州における現在の電子音響音楽に関する様々な活動や問題を電子音響音楽と一般社会、電子音響音楽と教育、電子音響音楽と現代音楽界などの観点からレポートしていく。今回は欧州ではないが、今年後半に訪れた幾つかのイベントや機関のうちから、トロント TIES、洗足学園音楽大学 DIGITAL MUSIC&ARTS PROJECT 2015、ブレーメン芸術大学 VM コンサートから印象に残った発言、事柄を紹介する。

This article-series reports today's issues and activities associated to electroacoustic music in Europe from the viewpoints of "electroacoustic music and general society", "electroacoustic music and education" and "electroacoustic music and contemporary music society".

1. TIES (トロント・インターナショナル・エレクトロアコースティック・シンポジウム)

カナダ電子音響音楽といえば、その活動は世界的に知られている。TIES は、New Adventures in Sound Art Toronto (NAISA) と The Canadian Electroacoustic Community (CEC) の共催で The Canadian Music Centre (CMC) の協力により毎年企画されており、今年は 8 月 10 - 22 日まで開催された。2007 年から毎年続けて開催され、今年で第 9 回を迎える。日中はペーパープレゼンテーションが CMC センターで、またレクチャーコンサートがホールで、そして開催期間中 TIES の企画と NAISA の企画という 2 つの別シリーズのコンサートが毎晩交互に生まれ、会場の小スペースでインスタレーションも行なわれるという、様々な形態のイベントが組み立てられていた。

今年の参加者は、カナダ以外ではお隣のアメリカ、英語圏のイギリス勢がほとんどを占めていた。インターナショナルといいながら偏りがあるのは常で、小さな規模なのに『インターナショナル』と称しているフェスティバルなどは、ただ地元に住んでいる外国人が一、二人参加しているだけだったりする。これは参加

者の多くが(研究費を含む)自費で出張せねばならない今日の状況を反映している。近ければ参加しやすいが大陸を隔てた作曲家達が参加するのは日程的にも難しい。アテンダンスを義務づけるフェスティバルに入選すれば作品の上演そのものを辞退するか大旅行するかの選択を迫られることになる。筆者が今回トロントを訪れたのは、ナイアガラの滝を一度は見てみたい、という動機(!)だけではなくて、カナダの電子音響音楽界の一般的な動向(大作曲家達だけでなく)を知りたい、という興味からだった。

シンポジウムのタイトルが、Electroacoustic であって Electroacoustic Music ではないこと、共催者の CEC も Electroacoustic Community であって Electroacoustic Music Community ではないことなどが、従来の『音楽』を脱した『サウンドスケープ』というカナダ独自の哲学を反映したこだわりのように思われる。TIES 主催の幾つかのコンサートで紹介された作品群は、サウンドスケープではなく『構成された作品』で、よく洗練されたグレインサウンドの響きが目立ち、アコースマティック作品の多くがアクスモニウム・パフォーマンスなど良くトレーニングされたサウンド・ディフュージョンで、カナダの電子音響音楽の指向性がイギリスとフランスのものとのちょうど中間辺りにある、という印象を受けた。しかし一方で、音の空間構築という点では逆にフェーダー操作によるパノラマ音像移動に頼り勝ちで、3D 音響空間処理などは筆者の作品で初めて聴くといった作曲家達も少なからずいた。この点は、Robert Normandeau や Gilles Gobeil などが早くから ZKM Zirkonium を使っているのを知っている筆者には意外だった。

音響映像作品の分野は、カナダには Jean Piché という大家がおり、また隣りのアメリカでは相当盛んな分野だという影響もあるのか、多く取り上げられていた。しかし、映像の方は多くが繊細で丁寧に作られている一方、音楽の方はそれほど印象に残らず、またステレオ(2ch)ばかりであったのが残念に思われた。そんな中で、音響映像作品では初日に上演されたモントリオール在住の作曲家 Myriam Boucher の『Cities』が特に印象に残った。

アクスマティック作品では Destellos コンクール 2

位入賞という作品が『良く出来た』作品だったが、作曲家本人によるアクスモニウム・パフォーマンスはやはり『素晴らしくやりすぎ』のフェーダー操作が返って作曲自体の表現意図を損ねている印象を受けた。スペクタクルな音像移動は客席から喝采を受けてはいたのだが。厳しい意見をいえば（そして厳しい意見はキラワレルのが常なのだが）、アクスマティック作品全体の印象はどれもノイズとグリッチばかり、グラニューラばかりで、耳を惹かれるような音響合成は少なく、ノイズに対するエステティクスも感じられないし、何よりも音の必然性が感じられない。グレインサウンドやグリッチはトレンドではあるが、そればかりを追いかけ、それだけで「これが自分の音世界だ」というのではあまりにも個性に乏しく、どの作品も似たような印象に終わってしまう。特にアメリカ、カナダの若い作曲家達はよく学びよく訓練され、上手に作曲しているという印象はあったものの、様々な個性に出会った、という感動はないままに終わった。

キーノート講演はシカゴ大学の Nicolas Collins によるもので、子供達を対象とした、ミニスピーカーを使つての電気の流れを理解させるワークショップや彼自身の最近の作品が紹介された。筆者は彼の学生時代の SuperCollider によるライブ・コーディング・パフォーマンスを何度か聴いたことがあるのだが、見違えるほど『老けた』彼の風貌とともに、音楽もスローな展開のミニマリズムの作風に変向していることに大変驚いた。失礼ながら「これがイギリスで会ったあのニックと同一人物だろうか？」とすら思ったほどだ。

シンポジウムではグラスゴー大学の Nick Fells と Luise Harris の企画によるパネル・ディスカッション『Fluidity in Current Sonic Practice: Pedagogical and practical perspectives』が印象に残った。最近の Organised Sound 誌の公募『Punkacademia, oppositional culture and the post-acousmatic in electroacoustic music』というタイトルでの問題提起に対しての「ポスト・アクスマティックというが、我々は本当に『ポスト・何か』なのか？」という疑問がテーマだ。筆者も GRM の Daniel Teruggi や OS 誌編集長の Leigh Landy などから、アクスマティックは死につつあるという発言を何度か聞かされているが、アクスマティックの次は何が来るのか？ という興味とそれに対する議論は、ここでも教育現場の観点から取り上げられていた。基本的には、筆者はランディの問いかけるような『流行』とか、「乗り遅れては大変だ」という危機感のようなものはそれほど感じていない。昔からアクスマティックを作曲していた知人達は、いまでもやはりアクスマティックを作曲しているし、ノイズ・パフォーマンスをやっていた同僚達は相変わらずノイズやグリッチに夢中だ。せいぜい昔ミュージック・コンクレートを作っていたのがテクノロジーの変遷につれてアクスマティック風になった

という程度で、創作の基本はどの知人も豹変していない。十数年前にアクスティックを専門に作曲していた人々は電子音響音楽全体からすればほんの一部だ。「我々は今ポスト XX と呼ぶところのデジタルとかアクスマティックという状況にその当時気付いてすらいただろうか？」(Fells&Harris) という疑問は、おそらく彼らがただ、その当時の『一部のアクスティック作曲家』の中にいなかった、ということなのだろうと理解した。（そして筆者自身も『居なかった』一人だ。）

パネラーの一人、Kevin Austin の「私が 1974 年に教え始めた時、学生は 8 人で、今は作曲専攻の学生の 80% は電子音響音楽をやりたいという。でも、本当のところは皆ゲーム音楽をやりたいのであって、サウンドはロックオリティだ」という発言が、推移の実体を語っていて印象的だった。つまり、昔は電子音響音楽をやりたい学生は少数派だった、そして現在でもやはり少数派だ、という点だ。いつぞやマンチェスター大学の David Berezan が「うちの大学ではアクスティック作曲とサウンドデザインは分けている。アクスマティックは少数派だけど、サウンドデザインはとても人気があってやりたい学生が多い。将来商業音楽なんかに進んでいく。」と述べていたのをふと思い出した。

2. 洗足学園音楽大学『DIGITAL MUSIC&ARTS PROJECT 2015』

10 月に行なわれたこの音楽祭の関連企画として、海外招聘音楽家として筆者とパートナーのイェンチのコンサートも企画された。日本の大学で現在電子音響音楽がどのように教えられ、また学生達がどのような作品を作っているのか、大いなる興味を持って、2 日間に渡る二つの学生作品コンサートを見聞し、自分たちのリハーサル、本番、そしてレクチャーを通して洗足学園音楽大学の学生の皆さんに接する機会を得た。公募による選抜だったそうで、どの作品も真摯な取り組みの姿勢が感じられ、前述の『電子音響音楽のトレンド』は取り入れながらも自分風に昇華することに工夫を凝らして、好感が持てた。無理をしない自然体の作曲姿勢というのだろうか。これが結果的にそれぞれの作品の個性として表れているのだろうか。現代音楽の分野で筆者が学生時代に体験したような、イデオロギー主導の『アタマデッカチ』な音楽とは違った、のびのびと創られた作品ばかりであったのも、日本人の音楽創作の根本的な姿勢として、西洋音楽をまったく離れた方がむしろ自然体の生き活きた表現になる、という筆者の自論と合致しているように思われた。日本人作曲家にとって、アクスマティックのような楽器を離れた自由なキャンバスはチャンスなのである。

また、宮木教授の「多くのことを考え、刺激を受けた」という発言を始め指導教官の方々の同様の謙虚な

発言が、ドイツ人のイエンチには大変驚きだったようで、「ドイツでそんな謙虚な発言をする教授は居ない。誰も彼もがいかに自分を偉く見せるか、自分が世界の重要人物であるかを主張することに熱心だ」とのコメントで、確かに洗足学園音楽大学の指導教官諸氏の勉強熱心で謙虚な姿勢が学科全体の良いチームワークを作り出し、強いては学生達にも良い影響を与えているのがよく理解出来た。ドイツでは学生ですら自分の偉大さ正しさを主張したがるので、こういった謙虚さは日本社会特有のものかもしれない。

3. ブレーメン芸術大学

その洗足学園音楽大学のちょうど一ヶ月後にブレーメン芸術大学で筆者達の VM 作品コンサートとレクチャーが組まれた。企画者はキリアン・シュブーン作曲科教授で、同大学の電子音響音楽スタジオの責任者である。ドイツ人には珍しい温厚で控えめな性格の人物だ。コンサートは洗足音大とほぼ同じ、レクチャーの方は、作曲技法が中心である。ブレーメンは90歳を超える大人物 Klaus Huber が健在で、引退したとはいえ元作曲科教授で Huber の奥さんでもあるヨング・パクパーンもいる。こういった大先輩教授たちが相変わらず作曲界の中心にいたので、筆者達を招聘してくれたキリアン・シュブーン (Kilian Schwoon) 教授はじめブレーメン芸術大学の作曲科教授達はまるでまだまだ若手といった感じだ。

レクチャーに出席した学生達の7割は留学生で、約半数は韓国人だ。ドイツ人学生は、というと一人か二人で、これがドイツの音楽大学の作曲科の現状でもある。元々留学生枠というのがあるはずなのだが、ドイツ人学生が少ないため、留学生を取らないと定員割れをしてしまう。定員割れをすると、次年度の予算を減らされ、学科の存続が危うくなる。なので、ドイツ人对留学生の割合を無視しなくてはならない。すると経費は税金で賄われるのにドイツ国民に還元せず外国人のためにほとんど使われるという点が問題になる(国立大学であり学生は学費無料)。これではまずいのだが、芸術音楽の作曲などは今どきのドイツではほとんど人気がないので、なんとかしなくてはならない。カールスルーエ音楽大学のように、Wolfgang Rihm という世界的に著名な作曲家が現役教授にいれば、学生はそれだけで集まるだろう。しかし多くの音大はそうではない。

こういった運営上の考慮があるのだろうというのは筆者の推測に過ぎないが、ヴィジュアル・ミュージックを自大学の新しいキャッチフレーズとする可能性を考える背景のひとつであるのは想像ができる。本来、映像を教育科目とするのは芸術大学の仕事だから、ドレスデンのような『音楽大学』であれば、同市内に芸

術大学があるためマルチメディアコース設置は越境行為となり、拮抗が生じる。ドイツではあまりにも役割分担が進みすぎ、また殆どの大学が国立なので、学際的創作領域の教育機関がなかなか作れない。融通が利かないのだ。が、幸いブレーメン芸術大学は『音楽大学』ではない。芸術系と音楽系の両方が学内にあるので、ヴィジュアル・ミュージックなどマルチメディアをコースとして設立するかどうかは単に大学内の問題だ。将来、ブレーメンに VM 関係の学科が出来るか、シュブーン教授(新学部長となった)の構想と手腕次第といえそうだ。

4. 著者プロフィール

ヒロミ・イエンチ・イシイ (Hiromi ISHII)

博士(PhD)。電子音響音楽作曲家またメディア・アーティストとして音楽作曲と映像制作の双方を手がける。ドレスデン音楽大学上級課程にてヴィルフリート・イエンチに電子音響音楽を師事。Konzert Examen(音楽家国家資格試験)合格後、英国から奨学金を得て2001年より英国シティ大学にて博士研究。サイモン・エマーソン、デニス・スモーリーに師事。CYNETart、フロリダ電子音響音楽祭、英国 SAN-EXPO、MusicAcoustica、Musica Viva、ベルギー Musiques&Recherches、オランダ・ガウデアムス、イタリア EMU 祭、Punto y Raya、NYCEMF など様々な音楽祭や音楽週間にて作品が入選/上演され、また西ドイツ放送、中部ドイツ放送、ドイツ放送などで放送されている。2006年(ZKM 奨学金)と2013年 ZKM 客員作曲家。WERGO よりポートレート CD『Wind Way 風の道』が出版。2011年にはケルン大学でポートレート・コンサート、2013年にはドイツ電子音響音楽協会 webradio よりポートレート番組が放送されている。ケルン在住。